

日本光学会 2012 (平成 24) 年度年次報告

1. 総 括

日本光学会幹事長 渡辺 正信



2012 年度を概観すると、例年の行事に加えてのおもな事からは下記のとおりであった。(1) 日本光学会創立 60 周年を迎えた。会誌「光学」4 月号で特集を組み、多くの方々から寄稿を頂いた。ホームページも一新することとし、2013 年 6 月からリニューアルされた。(2) 前年度に設

立された高野榮一光科学基金の活用が開始された。(3) 応用物理学会の公益法人化に伴う日本光学会の対応について、大きな道筋は前年度までにつけられたが、2012 年度は規程の見直しなどの作業を進めた。(4) 将来問題検討委員会を発足し、長期的視野からの今後の学会の方向の検討を開始した。

日本光学会の会員数は 2013 年 4 月末時点で A 会員 655 名、B 会員 824 名、特別会員 115 機関であり、長引く景気の低迷の影響もあり、昨年度に続き微減の状態が継続している。平成 24 年度終盤から、政府の積極的な景気浮揚策もあり、明るい声が久しぶりに聞かれるようになってきたが、この傾向がぜひ定着して進むよう、本会としても一定の貢献をしていきたいものである。以下、2012 年度の活動を振り返る。日本光学会は創立 60 周年を迎え、記念事業として「光学」4 月号で「創立 60 周年記念小特集」を掲載した。応用物理学会白木靖寛会長(執筆当時)をはじめ、18 名の方々から寄稿を頂いた。改めてこの場を借りて感謝申し上げます。

また 60 周年を機会にホームページの一新も進め、2013 年 6 月からリニューアルされた。

次におもな研究集会について記す。日本光学会の第 21 回年次大会 Optics & Photonics Japan 2012 が東京都江戸川区のタワーホール船堀で 10 月 23 日から 25 日まで開催された。講演件数 286 件、参加者数 556 人と盛況であった。また、日本光学会研究グループを中心に企画されたシンポジウム、恒例の国際シンポジウム日韓合同セッションが実施された。一般講演のほかに、基調講演として石川正俊氏(東京大学)による「広がる高速画像処理の世界—ビジュ

アルフィードバックの新展開—」が行われた。海外機関から、OSA 会長の Christopher Dainty 氏と SPIE 会長の Eustace L. Dereniak 氏による特別講演が行われた。会期中に日本光学会奨励賞、光設計賞の授賞式と記念講演が行われた。詳細については、Optics & Photonics Japan 2012 の伊藤実行委員長による報告を参照されたい。第 37 回光学シンポジウムが 6 月 14 日～15 日にわたり東京大学生産技術研究所で開催された。今回も「光学システム・光学素子の設計、製作、評価を中心として」という表題の下で、招待講演 8 件、一般講演 18 件の発表があり、参加者は 242 名であった。このほかにも各研究グループや各地区の主催による多くの研究会が開催されている。また、光学分野の特定のテーマについて系統だった知識習得の機会を提供する目的で、例年冬期講習会を開催している。今回は第 39 回を迎え、1 月 24 日と 25 日に東京大学本郷キャンパスで「光と磁気—基礎から応用まで—」のテーマで実施され、10 件の講演と 42 名の参加者があった。

出版関係では、和文学術誌「光学」が毎月刊行、欧文誌 Optical Review が隔月刊行されている。詳細については川田善正光学編集委員長と植田憲一 Optical Review 前編集委員長による報告を参照されたい。日本光学会は光学の分野の将来を担う若手研究者を対象にいくつかの賞を授与している。2012 年度の光学論文賞の受賞者は早澤紀彦氏(理化学研究所)と Dinesh N. Naik 氏(Universität Stuttgart)の 2 名で、授賞式は応用物理学会春季学術講演会会期中の 3 月 29 日に、日本光学会 2012 年度総会の会場にて行われた。2011 年度は東日本大震災の影響か応募者が少なく受賞者なしであったが、2012 年度は多数の応募があり、こういう面でも日常を取り戻せていることがうかがわれて心強い。日本光学会奨励賞の受賞者は、長谷単佑氏(東京工芸大学)と笹本益民氏(岩手大学)の 2 名で、授賞式は 10 月 23 日に Optics & Photonics Japan 2012 の会場で行われた。また、Optics & Photonics Japan ベストプレゼンテーション賞は、吉田洸平氏(東京農工大学)、岸達也氏(大阪大学)、佐々木佑太氏(千葉大学)、中村友哉氏(大阪大学)、豊田耕平氏(千葉大学)の 5 名であった。光みらい若手奨励金(コニカミノルタ科学技術振興財団賞)は角江崇氏(千葉大学)、光みらい学生奨励金(コニカミノルタ科学技術振興財団賞)は川本大樹氏(電気通信大学)と渋川敦史氏(北海道大学)の 2 名が採択された。高

野榮一光科学基金が2011年度に設立されたが、その活用のための委員会が2012年度に武田前幹事長を委員長として発足し、さまざまな活動の補助を開始した。詳細は同委員長による報告を参照されたい。

日本光学会には現在14の研究グループがあり、日常的な研究活動や研究会のほかに、国際会議を企画運営するなど活発な活動を行っており、日本光学会の活力となっている。

以上に述べたように、日本光学会は光学関連の研究と技術開発にかかわるほぼすべての分野で、会員相互の交流と情報交換の場としての役割を果たしてきた。本会の運営にご協力いただいている幹事の皆様、事務局の皆様、各委員会の委員の皆様にご心より御礼申し上げます。

2. 編集

「光学」

編集委員長 川田 善正

2.1 はじめに

会誌「光学」は、日本光学会が独自に企画・編集し、応用物理学会として毎月発行する機関誌である。光学界のさまざまなトピックスを取り上げ、4号を除く毎月号で特集を企画し、「総合報告」「解説」「最近の技術から」の枠組みで依頼記事を掲載するとともに、原著論文、学会からのお知らせ、文献抄録、書評、寄稿なども掲載しており、日本光学会の活動の核となるメディアとして機能している。なかでも特集企画は、日本光学会会員および光学界の興味や関心と活動動向を反映させるとともに、今後の研究活動をリードする役割も含めた企画を心がけている。特集企画は編集委員会で最も注力している内容である。厳しい経済情勢が続き、それが種々の形で学会へ影響を与えている中で、2012年も「光学」を無事に毎月発行することができた。以下、2012年における「光学」の編集状況を整理する。

2.2 発行状況

2012年は第41巻第1号から第12号まで、総ページ数が644ページであった。過去5年間の経緯をみると、726(07年)、726(08年)、636(09年)、666(11年)、710(11年)であり、昨年比べると減少しているが、一昨年度と同程度の状況を維持している。会員減少、原著論文の投稿数減少等の厳しい状況の中で、今後も月刊誌としての形態を維持していくには、より魅力ある雑誌としての企画、編集が必要であることはもちろんのこと、日本光学会として賛助会員も含めた実質的な会員増への取り組みが不可欠と考え

る。月平均のページ数は約54ページ、編集委員の旅費等も含めた経費は月平均137万円弱であった。ちなみに2011年は、月平均のページ数が59ページ、経費が142万円であり、出版経費削減の工夫が成果を上げたと考えている。これは、質を落とさずにコストを意識した編集業務を積極的に心がけた編集委員会と編集局の自助努力に依るところが大きい。

掲載記事に目を向けると、巻頭言は12編、特集企画の総合報告が6編、解説46編、「最近の技術から」が6編であった。4月号では、日本光学会60周年記念小特集を組み、多くの方から寄稿をいただくとともに、10年間の日本の光学技術をまとめた。4月号を含む特集題目は次の通りである。光学分野の注目すべきさまざまなトピックスを取り上げ、その分野で活躍される方々に執筆を依頼した。

- 1号 大気環境を調べる光技術
- 2号 光による機構系の駆動と制御
- 3号 実用化に向かう極端紫外リソグラフィ
- 4号 日本光学会60周年記念小特集/2011年日本光学会の研究動向
- 5号 実応用が進む三次元空間計測・認識技術
- 6号 環境負荷低減に向けた太陽光利用技術の進展
- 7号 最近の光ファイバーセンサー技術
- 8号 生体内の光伝搬解析
- 9号 広がりを見せる光周波数コム
- 10号 単一光子検出技術とその応用
- 11号 レーザー治療技術の現状と進展
- 12号 高出力レーザーシステムを実現する光学技術

4号は「日本光学会60周年記念小特集」に加えて、「2011年日本光学会の研究動向」を日本光学会に属する各研究グループごとに概説いただいた。

原著論文は年間を通して研究論文4編、研究速報1件、技術報告2件が掲載された。過去5年の13編(07年)、9編(08年)、4編(09年)、5編(10年)、9編(11年)をみると、昨年に比べて大きく減少しており、投稿論文数の増加は光学会が取り組むべき課題のひとつであろう。これ以外の記事として、「光の広場」のコーナーがあり、「さろん」が2編、書評が6編、さらに光科学及び光技術調査委員会が担当する「光学工房」「Web Watcher」「気になる論文コーナー」、「日本光学会 news」が例年通り掲載されている。

2.3 編集活動

編集委員会の委員総数は30名で、昨年と同じであった。関東と関西の光科学及び光技術調査委員会委員長も編集委員としてこの中に含まれている。編集委員会は奇数月の隔

月開催で、例年通り6回開催した。年間での委員の出席延べ人数は138名で1回当たり23名である。会議時間は4時間であり、途中10分程の休憩を挟むが毎回終了時間ぎりぎりまで熱心な議論が繰り広げられた。特集企画の審議形態は従来どおりであり、1回に2号分の1次構想、2次構想、企画決定の検討を行うため、毎回計6号分の企画内容を審議しており、この審議に会議時間のおよそ8割が割かれる。審議の円滑化を目指し、会議開催前には1次構想提出予定の草案を委員全体に配信し、メールによる事前検討も行った。このほか、書評小委員会の進捗状況、原著論文の投稿・審査状況、発刊後の反省、企画決定後の進捗状況、掲載順や読者の決定、会計、幹事会等の報告などを定例事項として扱っている。

出版経費については、編集局におけるDTPへの移行、レイアウトの工夫、郵送業者や印刷部数の見直しなど種々の経費削減の努力がなされ、結果的には予算額の74%程度の支出に抑えることができた。例年に比べて執行率が低い理由は、60周年記念号に対して予算が多めに計上されていたためである。2012年度は予算額に対して支出を大幅に抑えることができたが、会誌としての質を維持する必要性、経費が原著論文の掲載数やカラーページ数により変動することから、過度な経費削減・業務効率化は難しいものとする。この課題に対し、編集委員会として常に魅力ある特集企画を模索することはもとより、日本語であることの意義、利用価値を見直し、会員諸氏に“読んでもらえる”“活用してもらえる”会誌を目指すことが何よりも重要と認識している。原著論文数の増加も課題のひとつである。和文原著論文のあり方、活用の仕方、光学会全体で議論したいと考えている。

日本光学会のホームページのリニューアルに向けて、「光学」のページも整理した。内容がわかりやすくなるとともに、光学の記事をウェブ上で公開することについても検討した。その結果、巻頭言、原著論文などはより多くの読者に見ていただきたい内容として非会員の方にも公開し、特集記事などは会員限定で公開することとした。会員限定のページにはパスワードを付けて閲覧を制限し、会員は会誌全体をウェブ上でも閲覧できる形にした。過去の「光学」はデータを整備する時間が必要であるため、データが整った号から徐々に公開していくことを予定している。

2.4 おわりに

以上、2012年の「光学」編集について報告した。最後に、編集業務を担当いただいている編集局ならびに編集委員の皆様、また、「光学」の編集にご理解、ご支援をいただいている幹事長をはじめ、幹事・事務局・応用物理学会

分科会担当の皆様にご心より感謝申し上げますとともに、引き続きご協力を賜りたい。

「OPTICAL REVIEW」

前編集委員長 植田 憲一

2012年にOptical Reviewに一般論文として投稿された論文は合計101編で、その内訳は日本国内(43編)、中国(15編)、韓国(10編)、マレーシア(8編)、台湾(7編)、イラン(5編)、その他ドイツ、フランス、ロシア、スペイン、トルコ、サウジアラビア、クエート、イラク、イラン、インド、タイ、メキシコなど世界17か国からの論文を受理した。日本国内からの投稿が前年に比べて増加し、国内投稿比率は43%に増加した。2012年はさらにレーザーディスプレイ関係と光学デザイン関係国際会議の特集論文が、一般投稿論文とは別に投稿、査読、編集、出版されたので、Optical Reviewの出版は比較的順調に推移したといえる。特集号編集委員会をお願いした栗村先生、荒木先生には深く感謝したい。2013年度からは招待論文が投稿されるようになるので、国内外の論文比率が同等になると期待している。約10年前にOptical Reviewの編集長を引き受けた当初、年間投稿論文数が60編程度に落ち込んだところからスタートしたが、投稿論文数は徐々に増加している。創刊号以来の全論文のPDF化、日本光学会ホームページ上での国内公開、Springerと連携した国際公開などの努力を通じて、国際的知名度が上がったことが、海外からの投稿比率が増加した理由である。Optical Reviewが真の国際誌として認知されるようになったことは大変好ましいことであるが、同時に、日本光学会の英文ジャーナルとして、光学会会員が自らの望むジャーナルに育てていくという努力もますます必要だと感じる。

学術誌出版の世界では、Open Access(OA)問題が大きな話題となっている。昨年開催されたSPARC JapanのOpen Access Weekでも「日本におけるオープンアクセス—この10年、これからの10年」と題して議論がなされた¹⁾。OR編集委員長であり、同時に一研究者として学術出版に関係してきたものとして、植田も講演者、パネラーとして議論に参加した²⁾。出版関係者との議論¹⁾を通じて感じたことを、会員諸氏にも伝え、今後のOptical Reviewの方向を考える参考に供したい。

学術出版物の評価指標として、impact factor(IF)が取りざたされて久しい。IF値とは、出版後2年間にその学術誌に掲載された論文が他の論文にどれだけ引用されたかを

示す指標であり、トムソン・ロイター社からジャーナルの IF 値として毎年公表されている。今では、IF の高い論文誌に投稿するように誘導する政策が展開されているようにすら見える。出版界の議論では、ジャーナルの OA 化は論文アクセスを容易にするので、ジャーナルの IF 値を向上させるに効果的な手段だと強調されている。しかし、学術活動そのものの観点からいえば、近年のジャーナル IF 値の向上や論文引用統計の増加とは別に、科学論文の質が特に上がった証拠はない。むしろ、科学的に大きなインパクトを与える論文は、以前に比べて少なくなっているという指摘すらあるのが現状である。これらの指標はあくまでも見かけ上の評価を反映したものであり、本当の学術的価値を定める指標でないことに、日本光学会やそこに結集する研究者は留意する必要がある。

Optical Review を日本光学会が出版する理由は、日本光学会が信じる学術的価値を基準に、自分たちが世に問うだけの価値ある結果や考え方、それに至る背景、哲学などさまざまな問題を自由に表現することにある。決して、世界標準に合致した論文だけを出版することにあるわけではない。もしも、その判断基準が他のジャーナルと同一であるべきだと考えるなら、自らが苦勞をして英文ジャーナルを出版し続ける理由はない。平均値が価値を決めるわけではなく、Optical Review を公表の場を選んだごく少数の論文がジャーナルの価値を決める場合もあり得る。

論文誌のもうひとつの役割は、研究者の業績評価に使うことにある。そして、業績評価の指標としては、客観的評価のための peer-review を受けていることが重要な要素となる。基礎科学の分野では arXiv などのように査読以前の論文原稿が研究情報交流の中心的役割を果たす分野も多くなってきたが、研究者の業績評価は依然として、peer-review article とその内容評価で行われている。昨年 10 月に ORCID (Open Researcher and Contributor ID) がスタートし、研究者登録が開始された。皆さんの中にも登録を実行された方がおられると思うが、今後、徐々に出版団体側からの登録が進むにつれて、全世界の研究者に研究者 ID が付けられ、出版された論文との完全対応が可能になる予定である。これにより、従来判別が困難であった同姓同名や所属機関の変遷などの影響を受けることのない研究者の論文出版情報が統一され、一元的に評価することが可能となる。当然ながら、研究者の研究活動全般が一目瞭然となる時代となる。これまで以上に研究評価に利用されるようになるだろう。

Open Access 対応、ORCID 対応など、世界の出版情勢が変化する中で、Optical Review というジャーナルを価値

あるものにしていくには、なによりも日本光学会自身が英文ジャーナルを出し続ける価値を自己認識し、自分たちに必要なジャーナルに育てていく努力を続けていくことが必要である。

文 献

- 1) 第 5 回 SPARC Japan セミナー 2012. <http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2012/20121026.html>
- 2) 植田憲一: Open Access と (研究者としての) 私. http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2012/pdf/20121026_doc5.pdf

3. Optics & Photonics Japan 2012 (日本光学会年次学術講演会)

OPJ 2012 実行委員長 伊藤 雅英

日本光学会年次学術講演会である Optics & Photonics Japan (OPJ) 2012 は第 21 回目を迎え、2012 年 10 月 23 日 25 日の 3 日間にわたり、東京都江戸川区船堀の「タワーホール船堀」にて開催された。すでに会誌「光学」第 42 巻第 6 号 (2013 年) に開催報告と参加報告が掲載されているので、詳細はそちらを参照されたい。

2012 年度の講演会ではいくつかの新しい試みを行った。まず、シンポジウムを自主応募のみとし勧誘は行わず、一般講演を優先するようにした。また、プレナリーセッションを初日の 17~19 時とし、それ以外は一般セッションを平行で行った。これにより、セレモニー的な催しは減ったが、同じテーマの平行セッションをなくすることができ、実質的に学会としての大会の充実が図られた。講演申込者に分野をわかりやすくするため、これまで 18 あった分科分類を見直し、8 分類とした。こうした分科とは別に英語セッションを設け、1 つのセッションにさまざまな研究分類の発表を集め、留学生同士が交流し合う場を設けた。

2011 年度から冊子体の予稿集は廃止され CD-ROM のみの提供となったが、2012 年はそれに加えて事前配布を行い、参加者の便を図った。

プレナリーセッションにおいては、OSA 前会長の Christopher Dainty 教授、SPIE 会長の Eustace L. Dereniak 教授による特別講演、および、紫綬褒章を受賞され、日本光学会とも関係の深い、東京大学大学院情報理工学系研究科石川正俊教授による基調講演「広がる高速画像処理の世界—ビジュアルフィードバックの新展開—」が行われた。シンポジウムは、学会企画の日韓シンポジウムを含めて 5 つ開催された。

講演数は 286 件で、内訳は、口頭講演 181 件、ポスター

講演 57 件, シンポジウム等 40 件, ポストデッドラインペーパー 8 件であった。参加者は, 事前登録者 303 名, 当日登録者 213 名, 招待講演者 15 名であり, 実行委員を含めて 556 名であった。

Optics & Photonics Japan ベストプレゼンテーション (OPJBJ) 賞の応募規定についても見直しを行った。OPJBP 賞のエントリーは 88 件で, 厳正な審査の結果, 5 件が選定された。

併設展示会は, 講演会場に隣接する会場を使うことで, 参加者および展示者の交流が密になるようにした。展示会社は 20 社 23 コマ, 書籍展示は 3 社, カタログ展示は 6 社で, 景気の低迷にもかかわらず, 数多くの企業にご協力をいただいた。懇親会の参加者の内訳は, 事前登録の一般 52 名, 学生 8 名, 当日参加の一般 18 名, 招待講演者 11 名, 出展企業から 9 名であった。有料参加者は 98 名, 無料招待者は 8 名で総計 106 名であった。

OPJ は日本光学会の事業の中でも会誌出版に次ぐ予算規模で行われている重要な事業である。2012 年度の支出合計は約 786 万円で, その中で最も大きいものは会場費で 261 万円, 次いで運營業務委託費が 218 万円となっている。収入においては, 参加費収入が 282 万円で一昨年の東京開催より 92 万円減少したが, 展示会収入は 228 万円で逆に 34 万円増加した。これによってトータル 107 万円の赤字で, ほぼ例年通りであった。東京開催では会場費がかかることもあって黒字化は難しいが, 今後, 大学などでの開催の方向で努力していくべきであろう。

今回は, 18 名の実行委員, 15 名のプログラム委員の多大なご尽力により無事開催することができた。ここに感謝の意を表したい。次回の Optics & Photonics Japan 2013 は奈良県新公会堂 (奈良市春日野町) を会場として, 菊田久雄 (大阪府立大学) 実行委員長と, 齋木敏治 (慶應義塾大学) プログラム委員長のもとで 2013 年 11 月 12 日 (火) ~ 14 日 (木) に開催される予定となっている。ますますの充実した講演会になることを期待する。

末筆になりましたが, 会員の皆様方をはじめ関係各位のご支援のお陰で OPJ 2012 が無事に盛況で開催できたことに改めて感謝申し上げます。

4. 2012 (平成 24) 年度研究グループ事業報告

(1) ナノオプティクス研究グループ (Nano Optics)

5 月 23 日に慶應義塾大学日吉キャンパスにて第 20 回研究討論会記念シンポジウムを開催した。全体を特別講演 4 件, 若手招待講演 8 件, ポスターセッション 28 件で構成し

た。参加者は 100 名を超え, ナノオプティクスの今後の方向性を探る貴重な場となった。OPJ 2012 では日韓合同シンポジウム (ナノバイオイメーキングとナノオプトエレクトロニクス) を企画した。2013 年度より新体制がスタートするため, その運営方針を議論した。

(2) コンテンポラリーオプティクス研究グループ (Contemporary Optics Research Group)

第 24 回研究会「レーザーと原子光学—基礎から最近の話題まで—」を, レーザー学会との共催シンポジウムとして, 10 月 24 日, OPJ 2012 の会場 (船堀タワーホール) で開催した。まず, 代表幹事の岡田佳子よりイントロダクトリートークを行い, 続いて清水和子氏 (電気通信大), 早瀬潤子氏 (慶応大), 金本理奈氏 (明治大) の 3 氏により, 原子光学の基礎から最近の話題についての講演が行われ, 質疑では現状の問題点など活発な議論がなされた。

(3) 視覚研究グループ (Vision Research Group)

2012 年 11 月 14 日, 15 日に東北大学電気通信研究所において, 電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会, 東北大学電気通信研究所音響工学研究会などと共催で研究会を開催した。招待講演 1 件, 一般講演 19 件, 参加者は 40 名程度であった。視覚研究グループのメンバーが多く出席し, 内容も興味深かったが, 他研究会との交流も図れ, 有意義な研究会であった。

(4) 生体医用光学研究グループ (Biomedical Optics Group (BOG))

日韓の生体医用光学関連研究者の交流事業として, 8 月 28 日に, 済州島で行われた韓国光学会夏季大会 (the Optical Society of Korea Summer Meeting 2012) において Korea-Japan Biophotonics Special Session を共同開催し, 日本側からは 6 名の講演者を推薦した。前日に台風 15 号が沖縄から済州島を通過するハブニングはあったものの, セッションは盛会となり, とくに韓国若手研究者との交流が深まった。これで日本と韓国での相互開催が一回りしたので, 次年度は OPJ 2014 での開催を予定している。

(5) 情報フォトリクス研究グループ (Information Photonics)

会員数: 248 名, 機関誌: OPCOM NEWS 電子版 5 号発行。研究会: 第 6 回関東学生研究論文発表会 (3 月 1 日, 宇都宮大学, 講演 32 件, 参加数 59 名, 主催)。第 10 回関西学生研究論文講演会 (3 月 7 日, 奈良先端大, 講演 19 件, 参加者 43 名, 主催)。第 1 回計算オプティクス研究会 (6 月 3 日, 埼玉大, 講演 11 件, 参加者 15 名, 主催)。第 6 回新画像システム・情報フォトリクス研究討論会 (6 月 22 日, 大阪大, 講演 35 件, 参加者 63 名, 主催)。The

First International Workshop on Information Physics and Computing in Nano-scale Photonics and Materials (IPCN) (9月7日, University of Orléans, フランス, 講演15件, メンバーで企画・運営). 第13回情報フォトニクス研究グループ研究会(秋合宿)(9月27~29日, 湘南国際センター, 講演7件, ポスター22件, パネル討論, 参加者52名, 主催). ナノ光情報システム第1回研究会(11月2日, 静岡大, 講演5件, 主催). 日韓国際ワークショップ DHIP 2012 (11月19~21日, 徳島大学, 講演70件, うち招待講演32件, 一般投稿38件, 参加者89名, 主催). ナノフォトニクス創成20周年シンポジウム(12月4日, 東大, 講演7件, 参加者54名, 共催).

(6) 光設計研究グループ (Optics Design Group)

1) 国際会議

・ODF '12 St. Petersburg (2012年7月2日~5日, ロシア・サンクトペテルブルグ, 講演数145, 参加者220名)

2) 研究会開催

・第50回研究会「50回記念講演:自作設計ソフトと実務から生まれた新しい設計システム」[光と新しい加工技術](2012年11月3日, 板橋区立グリーンホール, 講演数7, 参加者118名)
・第51回研究会「デジタルカメラを支える最新技術 (pre ODF '14)」(2013年1月31日, 板橋区立文化会館, 講演数7, 参加者93名)

3) 第15回光設計賞実施

・記念講演, 授与式開催(2012年10月25日, タワーホール船堀, OPJ 2012内で実施)

4) 会誌発行

会誌「OPTICS DESIGN」No. 50, 51 発行

5) 学会活動への委員派遣

光学シンポジウム実行委員, OPJ プログラム委員, CP+アカデミー企画委員, 「光学」編集委員

(7) 微小光学研究グループ (Microoptics Group)

1) 研究会の開催

・第124回研究会「光ネットワークの最前線と微小光学」(2012年7月23日, 東京大学本郷キャンパス山上会館, 参加者数73名)
・第125回研究会「光散乱とその応用」(2012年10月9日, 富士フィルム西麻布ホール, 参加者数73名)
・第126回研究会「微小光学の周期表」(2012年12月7日, 早稲田大学 GCS 研究開発センター, 参加者数52名)
・第127回研究会「3D 空間情報と微小光学」(2013年

3月7日, 東海大学高輪キャンパス)

2) セミナーの開催

第17回微小光学特別セミナー「微小光学の基礎と応用」(2012年6月25日~26日, 東京大学生産技術研究所, 参加者95名)

3) OPJ2012 シンポジウムの開催

「レーザーディスプレイ・照明と微小光学」(2012年10月25日, タワーホール船堀, レーザーディスプレイ技術研究グループとの合同開催)

4) 機関誌の発行

「MICROOPTICS NEWS」Vol. 30, No. 2 ~ No. 4

「MICROOPTICS NEWS」Vol. 31, No. 1

5) 定期購読者数22口

(8) ホログラフィックディスプレイ研究グループ (HODIC)

2012年度は, 4回の研究会を開催し, 3月に1件予定している.

1) 2012年5月25日(金)に千葉大学西千葉キャンパスで研究会を行った. テーマは「ホログラフィーの教育応用とデジタルホログラフィー」, 参加者は23名であった.

2) 2012年9月7日(金)に日本大学理工学部船橋キャンパスで研究会を行った. テーマは「3次元映像およびホログラフィー」, 参加者は40名であった.

3) 2012年11月30日(金)に和歌山大学システム工学部で研究会を行った. テーマは「デジタルホログラフィとその応用」, 参加者は25名であった.

4) 2012年12月11日(火)~12日(水)に台湾・台南の崑山科技大学で研究会を行った. テーマは「Holographic Display Technology and Art」, 参加者は96名(日本からの参加は12名)であった. また, 3月8日(金)には東京工業大学大岡山キャンパスにて研究会を行う. さらに, 啓蒙活動として, 2012年11月2日(金)~11月4日(日)に, 日本大学理工学部船橋キャンパスで大学ホログラフィー展覧会を行った. 現在の会員数は118名である.

(9) 光波シンセシス研究グループ (Light-wave synthesis research group)

9月3日にフランス(グルノーブル)のCNRS Neel研究所との国際ジョイントワークショップ「France-Japan Joint Workshop on Advanced Lasers and Nonlinear Optics」を開き, 9件の招待講演を行った. 参加者は20名を超え, 活発な討論が行われた. 2月28日および3月1日に仙台市秋保グランドホテルにおいて「未来を切り開く最先端フォトニクス研究」と題する第19回研究会を開き, 計11件の招待講演を行った. 参加者は50名を超え, 活発な討論が行わ

れた。

(10) 次世代フォトニックネットワークのための光技術 研究グループ (Optics for Photonic Network)

2005年度までの活動により、本研究グループ発足の当初の目的である「光学と光通信との交流の場づくり」はほぼ軌道に乗ったとして、2006年度以降は次のフェーズに向けた展開を検討する期間と位置づけた活動を進めてきた。その結果、光通信に関係する分野が光技術の大きな牽引力のひとつとなっている状況に変わりはないといった内外の状況を鑑み、日本光学会の中に上述の関係分野との窓口としての本研究グループの活動を継続してきた。また、その期間に光通信の用途が陸上・海底系にとどまらず、宇宙空間や衛星間についても叫ばれるようになり、ますます光学技術と光通信技術の協調が重要性を増してきた。積極的に上述の関係分野との交流を進める活動(2007~2010年度へのシンポジウム共催・協賛、2008年度の合宿開催などの例)に注力することを2012年度以降の活動指針とし、2012年度は、これまでに達成された関連する分野の研究者の情報交換の場づくりと、震災などの内外の状況を踏まえた光通信関連の内外の活動との連携の強化の一環として、日本と中国の研究者間交流をアジア全体に広げること検討したが、内外の国際状況の関係や双方の日程調整の問題もあり、十分な活動に至らなかった。このため、次年度の補助金申請は行わない。

(11) ボリュームホログラフィックメモリ技術研究グループ (Research Group on Volume Holographic Memory Technology)

2012年度は6/22(金)に、神戸大学においてレーザー学会関西支部研究会との共催で「TB級メモリの実現に向けて」と題して第16回技術研究会を開催した。記録材料、記録システム、デバイスおよびコーディングに関して4件の講演をプログラムし、全員で35名の参加があった。また、10月22日(月)には東京大学生産技術研究所において「アーカイブ応用を目指して」と題して第17回技術研究会を開催し、市場動向、HD映像再生、データ転送および磁気ホログラムに関する4件の講演を実施した。参加者は23名であった。

(12) レーザーディスプレイ技術研究グループ (Research Group on Laser Display Technology)

当研究グループは年度内に2回の技術研究会を東京大学生産技術研究所にて開催した。第10回研究会「加速を始めたスマートレーザーディスプレイ関連技術」は2012年7月27日(金)開催、参加者121名、第11回研究会「応用を拡げるスマートレーザーディスプレイとそのコア技術」は

2013年1月16日(水)開催、参加者130名であった。OPJ 2012において、微小光学研究グループと共同で、シンポジウム「レーザーディスプレイ・照明と微小光学」を開催した。また、世界で初めてとなるレーザーディスプレイ国際会議を2012年4月25~27日にパシフィコ横浜で開催、12か国から151名の参加者があった。

(13) デジタルオプティクス研究グループ (Digital Optics Research Group)

9月にキルギス共和国で開催された International Workshop on Optics and Photonics 2012 で招待講演(当研究グループから3名)を行った。10月にOPJ 2012内でのシンポジウムを実施し、6件の招待講演を開催した。11月に台湾で開催された International Workshop on Holography and Related Topics、および徳島で開催された The Second Japan-Korea Workshop on Digital Holography and Information Photonics の開催に、委員および講演者として貢献した。12月に那覇市てんぶす那覇にて第3回研究会「デジタルホログラフィの強みと今後の展開」を開催した。琉球大学からの参加を含む12名の参加があり、交流の一助となった。

(14) 偏光計測・制御技術研究グループ (Polarization Science and Engineering)

6月29日(金)に第8回偏光計測研究会を(株)堀場製作所東京セールスオフィス(東京・淡路町)にて開催した。研究会では、午前の部で海外からの研究者による2件のチュートリアル講演を行った。チュートリアル講演の講演者と講演のタイトルは以下のとおりである。午後は6件の一般講演を行った。

- 1) E. Garcia-Caurel (LPICM, Ecole Polytechnique, CNRS, France) "Mueller ellipsometry, basic principles, instrumentation and applications"
- 2) Maria Losurdo (Institute of Inorganic Methodologies and of Plasmas, IMIP-CNR, Italy) "Graphen and plasmonics: The nanoscale challenges for real-time spectroscopic ellipsometry"

参加費(予稿集代)として一般3,000円、学生300円を徴収した。参加者は55名。

10月24日(水)OPJ 2012において、シンポジウム「偏光とイメージング」を当研究グループの企画として開催した。シンポジウムでの講演数は8件であった。

運営委員会を、第8回偏光計測研究会(6月)と応用物理学会(愛媛大学、9月)の折に開催した。

5. 2013 (平成 25) 年度研究グループ事業計画

(1) ナノオプティクス研究グループ (Nano Optics)

新体制のもとで、秋季に第21回研究討論会を開催する。研究会ごとのテーマ設定、若手招待講演、ポスター発表などの新たな枠組みを導入し、特に若手、学生の育成に積極的に取り組む。7月にシンガポールで開催される第9回アジア環太平洋近接場光学国際会議 (APNFO-9) に協賛し、研究グループの多くの委員がアドバイザーボードやプログラム委員などの形で貢献する。OPJにてシンポジウムを企画し、その他随時研究会、講演会、国際的活動などを行う。

(2) コンテンポラリーオプティクス研究グループ (Contemporary Optics Research Group)

多岐にわたる光学分野において、最先端の研究の基礎となる部分に重点をおき、若手研究者・技術者および学生の参加しやすい会員相互の実質的なネットワークづくりを進めるために、以下のことを計画している。

- 1) 企業あるいは大学の研究施設への見学会を兼ねた研究会を年2回程度実施。(見学先等詳細は未定。また、他学会あるいは研究会との共催も予定。)
- 2) 会員メーリングリストを通じての、関連する国際会議、学会、イベント等の紹介および報告。

(3) 視覚研究グループ (Vision Research Group)

2013年9月に電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会と共催により研究会を開催予定である。おもなテーマを眼球運動とし、多くの学会にまたがる眼球運動に関連する研究を集めてレベルの高い研究会とするねらいである。発表件数は20件程度、招待講演1件程度、参加人数は40名程度、場所は京都を予定している。

(4) 生体医用光学研究グループ (Biomedical Optics Group (BOG))

日韓交流事業については、一昨年が日本、昨年は韓国で交互に開催したので、次年度はOPJ2014での開催を企画する予定である。また、今回のAsian and Pacific Rim Symposium on Biophotonics (APBP) 開催に関する国内外の調整を継続する。生体医用光学研究会の定期的な開催に向けて、世話人の組織化を図る予定である。

(5) 情報フォトリクス研究グループ (Information Photonics)

特定の先進的テーマについて深く議論するワーキンググループを設置し、研究会等を実施する。情報フォトリクス分野をさまざまな観点から俯瞰するIPGシンポジウム(6月10日～11日、東京工業大学)を開催する。このほか、関西学生研究論文講演会、関東学生研究論文講演会、情報

フォトリクス研究グループ研究会(秋合宿)の主催、JSAP-OSA ジョイントシンポジウムやDHIPなどの国際活動、OPJ 2013 や応用物理学会講演会でのシンポジウムを予定している。また、機関誌OPCOM NEWSの発行や、メーリングリストによる情報配信を行う。

(6) 光設計研究グループ (Optics Design Group)

- 1) 国際会議: ODF '14 (2014年2月12日～14日、東京、板橋区)
- 2) 研究会: 第52回、第53回研究会開催
- 3) 光設計賞: 第16回光設計賞実施
- 4) 出版: 会誌「OPTICS DESIGN」No. 52, 53 発行

(7) 微小光学研究グループ (Microoptics Group)

- 1) 研究会の開催
 - ・第128回研究会(テーマ:「シリコンでフォトリクス」)(2013年5月14日、東京大学生産技術研究所) ※電子情報通信学会シリコンフォトリクス時限研究専門委員会との合同開催
 - ・第129回研究会(テーマ: グリーンフォトリクス関連)(2013年7月26日、慶應義塾大学日吉キャンパス)
 - ・第130回研究会(テーマ未定)(2013年12月6日、場所未定)
 - ・第131回研究会(テーマ未定)(2014年3月、場所未定)
- 2) 国際会議の開催
 - 第18回微小光学国際会議(MOC '13)(2013年10月27日～30日、東京工業大学蔵前会館) ※応用物理学会、ICO、東京工業大学の共催によりICO Topical Meetingとして開催

3) 機関誌の発行

「MICROOPTICS NEWS」Vol. 31 No. 2～4, Vol. 32, No. 1

(8) ホログラフィックディスプレイ研究グループ (HODIC)

2013年度は4回の研究会(5月、8月、11月、3月)を計画する。これらは、ホログラフィーを中心とした立体映像の講演などを予定する。特に5月には、鈴木岡田記念賞の授賞式と、記念講演を予定する。また、啓蒙活動として、ホログラム講習会、大学ホログラフィー展覧会を行うとともに、各種展示会などの後援を行い、ホログラフィーの素晴らしさを広めてゆく予定である。

(9) 光波シンセシス研究グループ (Light-wave synthesis research group)

研究会を2回程度開催する予定である。詳細な情報は、随時研究グループWebサイト(<http://physics.tp.chiba>)

u.jp/~omatsu/lws/index.html)にてアナウンスする。

(10) 次世代フォトニックネットワークのための光技術 研究グループ (Optics for Photonic Network)

2013年度は、内外の国際状況の関係などにより足踏みしていた関連する分野の研究者の情報交換の場づくりと、震災などの内外の状況を踏まえた光通信関連の内外の活動との連携の強化について、これまでに連携を強化してきた日本と中国の研究者間交流をアジア全体に広げる取り組みを推進する。特に、関連するCLEO-PR&OECC/PSといった国際会議が国内で開催される機会を活用して、最近光学技術と光通信技術の協調が重要性を増している分野(含む光インタコネクションなど)におけるアジアの研究者を交えた意見交換の場の提供を目的とした研究会(開催日:7月上旬,開催場所:京都,参加予定人数:50名弱)の企画を予定している。

(11) ボリュームホログラフィックメモリ技術研究 グループ (Research Group on Volume Holographic Memory Technology)

本年度は7月11日(木)に宇都宮大学にて第18回技術研究会の開催を予定しており、昨年のISOM2012での発表に関連したテーマを中心に4.5件の講演を計画中である。また、秋にはOPJ2013の開催に合わせて第19回技術研究会を開催予定である。昨年度はワーキング活動が少し停滞していたが、本年度は少しずつ活動を進めていきたい。

(12) レーザーディスプレイ技術研究グループ (Re- search Group on Laser Display Technology)

レーザーディスプレイ技術研究グループの本年度の活動としては、年度内に2回の技術研究会開催を予定している。また、第2回国際会議(Laser Display Conference)をパシフィコ横浜会議センターで4月23日~25日に開催予定である。

今年度開催予定の公開技術研究会:第12回レーザーディスプレイ技術研究会(2013年7月10日(水)を予定,東大生研),第13回レーザーディスプレイ技術研究会(2014年1月~2月を予定,場所未定)。

(13) デジタルオプティクス研究グループ (Digital Optics Research Group)

デジタルオプティクスの啓蒙活動として、デジタルホログラフィに関するセミナーの開催を計画している。例年通り、The Third Korea-Japan Workshop on Digital Holography and Information Photonics(韓国)およびInternational Workshop on Holography and Related Topics(日本)の開催に協力し、引き続き、国内外のデジタルオプティクスの研究者との交流を深める。ホームページや研究

会を通して国内の研究者に研究グループをPRし、引き続き、会員の増加を推進する。

(14) 偏光計測・制御研究グループ (Polarization Science and Engineering)

5月に第6回分光エリプソメトリー国際会議が京都にて開催されるので、当研究グループのメンバーも運営委員として協力する。第9回偏光計測研究会を秋ごろに計画しているが、詳細は3月の応用物理学会の折に運営委員会を開き討議する。

6. 会 計

前予算担当会計幹事 野村 博
前収支担当会計幹事 内田 恒夫

2012年度決算は当期収支が212万円の赤字となった。予算策定時においては引当金取崩収入389万円を含むものであったが、60周年記念事業の支出が289万円(予算)から11万円(決算)へ大幅な減少となったことから、実質的には予算よりも大幅に赤字額が抑えられた執行となっている。

2012年度各事業の収支は以下の通りであった。「講習会・講演会事業」全体では90万円の赤字である。「冬期講習会」と「光学シンポジウム」がそれぞれ11万円と6万円の黒字に対し、「Optics & Photonics Japan」が107万円の赤字となったためである。これは会場費が高い東京での開催が影響している。今年度も「サマーセミナー」は開催していない。「会誌出版事業」では、「Optical Review」が88万円の赤字で、「光学」は952万円の赤字であった。特筆すべき点としては、期中に実施した契約更改(固定制から歩合制へ)に伴い、広告収入が115万円(630万円から515万円へ)減少したことである。「産学官推進事業」は11万円の赤字であった。

2013年度予算は、事業活動収支で1,590万円の赤字を見込んでいる。このうち「HPリニューアル事業」の400万円と「学会参加補助事業」の100万円は積立金会計からの取崩しを充てる計画であるため、実質的には1,090万円の赤字予算となっている。2012年度予算(740万円の赤字)からさらに赤字幅が拡大している要因は、おもに広告収入の減少を1年分見込んだことによる。

日本光学会では、過年の黒字を引当金として積み立てた特定資産積立金を含む繰越金が単年度の事業規模とほぼ同等額となっており、これを計画的に削減することが求められている。しかし、その一方で、赤字予算の経年的継続が学会の赤字体質を慢性化させる懸念が指摘されており、こ

れを避けるため、将来の収入増、あるいは支出減に結びつく事業に積立金を充て、経常的な支出には通常予算を充てた。現在は「広告形態が紙からWebへ」という大きな時代の変化の最中にある。紙ベースの広告収入の減少はやむを得ないと考えるが、「HPリニューアル事業」に積立金を充ててWeb広告の強化を図り、この時代の変化に対応する。今後Web広告が順調に増加すれば、全体としての広告収入は改善するものと考えられる。

ここ数年会員数は単調に減少しており、景気の低迷や震災などの影響で講習会等も参加費の収入増を期待しにくい状況にある。会員満足度が高く、魅力を高める事業を心掛け、収支バランスの改善を目指す。また、一昨年に設立された「高野榮一光科学基金」は、日本光学会の活動範囲と重複するところが多い。高野榮一様のご遺志に沿った基金の活用強化を促すとともに、本会の事業内容の整理・調整を行う必要がある。日本光学会の継続的な運営と発展のため、引き続き会員皆様のご理解とご協力をお願いします。

7. 高野榮一光科学基金委員会活動報告

高野榮一光科学基金委員会 委員長 武田光夫

高野榮一光科学基金は、元日本光学会会員、故高野榮一氏により日本光学会に遺贈された遺産をもとに2011年に設立され、同氏のご遺志に沿って以下のような事業の支援をしている。

- (1) 光科学と光技術に関わる研究分野において優れた研究成果をあげた者の顕彰。
- (2) 光分野の将来の人材育成に資する事業。
- (3) 光分野の産学官連携の推進と拠点作りに資する事業。
- (4) 日本光学会の活動の国際化に資する事業。
- (5) 日本光学会の研究グループの研究活動の活性化支

援。

- (6) 日本光学会の出版事業の強化支援。
 - (7) 日本光学会の主催する研究集会の内容の充実のための諸活動の助成。
 - (8) 上記の事業活動の実施に必要な事務経費と人件費。
- 2012年度に支援を行った事業は以下の通りで、未確定分を含む概算支援総額は724万円である。括弧内は実施主体の研究グループや組織を示す。

- ・レーザーディスプレイ国際会議 LDC 2012, 4/26-27 (レーザーディスプレイ研究グループ)
- ・第8回光設計・製造を中心とした国際会議 ODF '12, St. Petersburg, 7/3-5 (光設計研究グループ)
- ・第8回光設計・製造を中心とした国際会議 ODF '12, St. Petersburg, 7/3-5の若手技術者・研究者の渡航費補助 (光設計研究グループ)
- ・Optical Review (OR) の招待論文の内容充実 (OR出版委員会)
- ・第4回 HoloMet 国際シンポジウム, 7/27 (情報フォトリニクス研究グループ)
- ・SMETHODS 若手光技術者教育制度の視察, 10/1-5 (光設計研究グループ)
- ・光設計研究グループ第50回研究会の国際招待講演, 11/2 (光設計研究グループ)
- ・デジタルホログラフィーと情報フォトリニクスワークに関する第2回日韓ショップ, DHIP 2012, 11/19-21 (デジタルオプティクス研究グループ)
- ・光設計研究グループ第51回研究会 (プレ ODF14) の国際招待講演, 1/31 (光設計研究グループ)

2013年度、2014年度についても新たな支援の計画を進めている (助成の申請書と受付は日本光学会事務局まで)。高野榮一光科学基金とその設立の詳細については「光学」第41巻第3号 (2012年3月発行) を参照されたい。

2012 年度事業報告／2013 年度事業計画

	2012 年度事業報告 (2012 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日)	2013 年度事業計画 (2013 年 4 月 1 日～2014 年 3 月 31 日)
1. 会誌の発行	「光学」 Vol. 41, No. 4 ～ Vol. 42, No. 3 (12 号)	「光学」 Vol. 42, No. 4 ～ Vol. 43, No. 3 (12 号)
2. 欧文誌の発行	「Optical Review」 Vol. 19, No. 2 ～ Vol. 20, No. 1 (6 号)	「Optical Review」 Vol. 20, No. 2 ～ Vol. 21, No. 1 (6 号)
3. 光学論文賞・日本光学会奨励賞・OPJ ベストプレゼンテーション賞・光みらい奨励金の授与	<p>光学論文賞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早澤紀彦 (理化学研究所) ・Dinesh N. Naik (Universität Stuttgart) <p>日本光学会奨励賞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長谷隼佑 (東京工芸大学) ・笹本益民 (岩手大学) <p>Optics & Photonics Japan ベストプレゼンテーション賞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・吉田洸平 (東京農工大学)・岸 達也 (大阪大学) ・佐々木佑太 (千葉大学)・中村友哉 (大阪大学) ・豊田耕平 (千葉大学) <p>光みらい若手奨励金 (コニカミノルタ科学技術振興財団賞)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・角江 崇 (千葉大学) <p>光みらい学生奨励金 (コニカミノルタ科学技術振興財団賞)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・川本大樹 (電気通信大学)・渋川敦史 (北海道大学) 	<p>光学論文賞</p> <p>日本光学会奨励賞</p> <p>Optics & Photonics Japan ベストプレゼンテーション賞</p> <p>光みらい奨励金 (コニカミノルタ科学技術振興財団賞)</p>
4. 講演会・講習会	<p>第37回光学シンポジウム「光学システム・光学素子の設計、製作、評価を中心として」 6月14,15日 242名</p> <p>2012年度電気関係学会北陸支部連合大会 9月1,2日 524名</p> <p>Optics & Photonics Japan 2012 10月23～25日 556名</p> <p>2012年度北陸信越支部新潟県講演会「技術者のための精密測定の基礎と最新光学計測」 12月6日 97名</p> <p>第46回光学五学会関西支部連合講演会「光と医療」 12月15日 49名</p> <p>2012年度中部地区研究会「光センサーの最新技術」 12月17日 17名</p> <p>第9回北海道地区合同学術講演会 1月11,12日 140名</p> <p>第39回冬期講習会「光と磁気—基礎から応用まで—」 1月24,25日 42名</p> <p>2012年度関西講演会「光学と農業」 2月1日 31名</p>	<p>第38回光学シンポジウム「光学システム・光学素子の設計、製作、評価を中心として」 6月27,28日</p> <p>2013年度電気関係学会北陸支部連合大会 未定</p> <p>Optics & Photonics Japan 2013 11月12～14日</p> <p>2013年度北陸信越支部講演会 未定</p> <p>第47回光学五学会関西支部連合講演会 未定</p> <p>2013年度中部地区研究会 未定</p> <p>第10回北海道地区合同学術講演会 未定</p> <p>第40回冬期講習会 1月16,17日</p> <p>2013年度関西講演会 未定</p> <p>応用物理・物理系学会中国四国支部合同学術講演会 未定</p>
5. 研究グループ	ナノオプティクス, 光波シンセシス, コンテンポラリー・オプティクス, 視覚, 生体医用光学, 情報フォトニクス, 光設計, 微小光学, ホログラフィックディスプレイ, 次世代フォトニックネットワークのための光技術, ボリュームホログラフィックメモリ技術, レーザーディスプレイ技術, デジタルオプティクス, 偏光計測・制御技術	ナノオプティクス, 光波シンセシス, コンテンポラリー・オプティクス, 視覚, 生体医用光学, 情報フォトニクス, 光設計, 微小光学, ホログラフィックディスプレイ, 次世代フォトニックネットワークのための光技術, ボリュームホログラフィックメモリ技術, レーザーディスプレイ技術, デジタルオプティクス, 偏光計測・制御技術
6. 幹事会・委員会	<p>幹事会 3回</p> <p>常任幹事会 3回</p> <p>「光学」編集委員会 6回</p> <p>光科学および光技術調査委員会 (関東) 3回</p> <p>光科学および光技術調査委員会 (関西) 3回</p> <p>「Optical Review」編集委員会 1回</p> <p>「Optical Review」出版委員会 1回</p>	<p>幹事会 3回</p> <p>常任幹事会 3回</p> <p>「光学」編集委員会 6回</p> <p>光科学および光技術調査委員会 (関東) 3回</p> <p>光科学および光技術調査委員会 (関西) 3回</p> <p>「Optical Review」編集委員会 1回</p> <p>「Optical Review」出版委員会 1回</p>
7. 会員数	<p>2012年12月末日現在 (() 内は昨年度)</p> <p>A 会員 677名 (684名)</p> <p>B 会員 823名 (851名)</p> <p>特別会員 117口 [A: 72口, B: 13口, C: 32口] (120口)</p> <p>賛助会員 63社90口 (73社110口)</p>	

2012 年度収支決算

(収入の部)

2012年1月1日～12月31日

大 科 目	中 科 目	予 算	決 算	内 容 (金額記入)
事務局運営費	収入	17,718,000	18,364,655	
	会 費 収 入	17,678,000	18,056,635	
	そ の 他 収 入	40,000	308,020	幹事会懇親会費収入, 広告収入, 資料コピー代
事業収入	収入	38,454,000	34,089,949	
	講習会, 講演会収入	10,782,000	9,581,469	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 1,405,100/ Optics & Photonics Japan 6,792,452/ 支部その他 32,617/ 光学シンポジウム 1,351,300/
	会誌出版事業収入「光学」	7,330,000	5,834,363	別刷代収入 656,670/ 広告料収入 5,151,693/ 懇親会費 26,000/
	会誌出版事業収入「Optical Review」	8,300,000	6,294,983	別刷投稿 4,944,000/ 購読料 1,254,983/ 国際協力支援金 96,000/
	研究グループ事業	11,176,000	11,693,134	参加費収入(会費) 7,316,290/ 予稿集収入 1,063,000/ 協賛金収入 0/ 1,950,000/ 受取寄付金収入 100,000/ 雑収入(バックナンバー等) 713,844 展示会収入 0/ 光学研究G補助金収入(日本光学会から) 550,000/
	産官学推進事業	866,000	686,000	
雑収入	収入	300,000	200,990	
	受 取 利 息	0	11,530	
	雑 収 入	300,000	189,460	バックナンバー代
引当金戻	入	0	0	
	貸倒引当金戻入	0	0	
繰入金収入	収入	9,259,000	8,918,383	
	分科会賛助会費還元金	3,808,000	3,504,000	
	分科会給与補助	5,451,000	5,414,383	学会担当者分給与応物から繰り入れ
当期収入合計		65,731,000	61,573,977	
前期繰越収支差額		79,936,000	72,326,030	事業活動繰越金 24,275,837/ 特定資産積立 48,000,000/ 固定資産期首残高 50,193/
収入合計		145,667,000	133,900,007	

(支出の部)

大 科 目	中 科 目	予 算	決 算	内 容 (金額記入)
講習会, 講演会事業費		10,905,000	10,605,310	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 1,295,969/ Optics & Photonics Japan 7,864,128/ その他 支部 155,655/ 光学シンポジウム 1,289,558/ 国際会議 0/
	臨 時 雇 賃 金	520,000	479,443	臨時雇賃金 0/ 0/ 463,443/ 0/ 16,000/ 0/
	印 刷 製 本 費	1,850,000	1,605,884	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 431,536/ Optics & Photonics Japan 763,035/ その他 支部 0/ 光学シンポジウム 411,313/ 国際会議 0/
	諸 経 費	8,535,000	8,519,983	業務委託費 0/ 0/ 2,180,493/ 0/ 0/ 0/ 旅費交通費 0/ 187,780/ 552,646/ 5,860/ 67,640/ 0/ 賃借料 0/ 173,900/ 2,617,880/ 0/ 130,400/ 0/ 通信運搬費 0/ 31,125/ 36,961/ 0/ 43,830/ 0/ 懇親会費 0/ 64,890/ 645,620/ 0/ 295,944/ 0/ 会議費 0/ 37,047/ 164,234/ 0/ 121,152/ 0/ 消耗品費 0/ 0/ 84,670/ 6,126/ 32,199/ 0/ 諸謝金 0/ 368,641/ 272,222/ 63,354/ 170,975/ 0/ 雑費 支払手数料 0/ 1,050/ 82,924/ 315/ 105/ 0/ 共催会合負担金 0/ 0/ 0/ 80,000/ 0/ 0/ 補助金支出 0/ 0/ 0/ 0/ 0/
会誌出版事業「光学」		22,216,000	15,351,727	
	印 刷 製 本 費	8,926,000	6,445,955	組版代 2,068,395/ 製版代 723,240/ 刷版代 1,118,250/ 印刷代 492,450/ 製本代 392,700/ 別刷印刷代 162,855/ 用紙代 1,488,065/ 一般印刷製本費 0/
	郵 送 費	2,500,000	1,873,172	
	諸 経 費	10,790,000	7,032,600	業務委託費 5,302,500/ データベース作成 0/ 編集委旅費交通費 1,317,170/ 通信運搬費 132,912/ 賃借料 6,800/ 会議費 93,188/ 消耗品費 0/ 諸謝金 0/ 雑費 615/ 懇親会 179,415/
会誌出版事業「Optical Review」		10,535,000	7,173,152	
	印 刷 製 本 費	4,600,000	2,871,981	組版代 1,110,375/ 製版代 246,591/ 刷版代 421,050/ 印刷代 211,050/ 製本代 271,719/ 別刷印刷代 133,066/ 用紙代 478,130/ 一般印刷製本費 0/ その他印刷費 0/
	郵 送 費	1,400,000	1,048,959	
	諸 経 費	4,535,000	3,252,212	業務委託費 2,278,000/ 英文校閲料 748,679/ 旅費交通費 0/ 通信運搬費 3,780/ 賃借料 115,920/ 会議費 25,000/ 支払リース料 0/ 貸倒引当金繰入 0/ 別刷投稿料補助 0/ 雑費 80,833/ 懇親会 0/
産官学推進事業		466,000	800,433	
	印 刷 製 本 費	26,000	39,753	
	諸 経 費	440,000	760,680	臨時雇賃金 9,000/ 旅費交通費 82,680/ 賃借料 84,000/ 通信運搬費 6,745/ 懇親会費 60,000/ 奨励金支出 450,000/ 会議費 34,922/ 消耗品費 0/ 諸謝金 33,333/ 雑費 0/
研究グループ事業		11,517,000	11,790,846	
	印 刷 製 本 費	2,158,000	1,791,338	
	諸 経 費	9,359,000	9,999,508	臨時雇賃金 1,009,500/ 会議費 2,605,316/ 旅費交通費 1,771,886/ 通信運搬費 184,614/ 消耗品費 181,595/ 賃借料(会場費) 1,977,275/ 諸謝金(税込) 1,176,112/ 支払寄付金 500,000/ 諸経費 593,210/
国際協力支援金		1,100,000	96,000	
	旅 費 交 通 費	0	0	
	諸 経 費	1,100,000	96,000	国際協力支援金 0/ 諸謝金 0/ 会議費 0/ 他会計支出費用 96,000/ 雑費 0/ (予算では分科会運営費として計上)
表彰事業		500,000	407,921	
事務局運営費(含幹事会)		13,572,000	15,240,296	
	給 与 手 当	5,451,000	5,414,383	学会担当者負担
	一 般 印 刷 製 本 費	50,000	126,263	諸印刷代, 資料コピー代
	賃 借 料	1,410,000	1,631,653	応物会議室使用料, レンタルサーバ代
	諸 経 費	5,843,000	6,851,482	業務委託費 3,274,999/ 電子版作成運営費 628,740/ 旅費交通費 2,184,231/ 通信運搬費 66,715/ 電話料 50,205/ 会議費 159,558/ 懇親会 157,185/ 清掃光熱水料費 0/ 消耗品費 146,452/ 運用保守費 0/ 雑費 0/ 租税公課 70,100/ 振替手数料 113,297/
	助 成 金 支 出	600,000	550,000	研究グループ助成金
	貸 倒 引 当 金	218,000	666,515	未納会費
繰入金支出		2,316,000	2,230,164	(他会計への支出額)
	学 会 事 務 費	2,316,000	2,230,164	事務手数料
予備費		0	0	
当期支出合計		73,127,000	63,695,849	
当期収支差額		-7,396,000	-2,121,872	
次期繰越収支差額		72,540,000	70,204,158	事業活動繰越金 27,153,965/ 特定資産積立 43,000,000/ 固定資産期末残高 50,193/
支出合計		145,667,000	133,900,007	

2013 年度正味財産増減予算書

(収入の部)

2013 年 1 月 1 日～12 月 31 日

大 科 目	中 科 目	予 算	内 容 (金額記入)
事務局運営費	収入	17,784,000	
	会 費 収 入	17,784,000	
	そ の 他 収 入	0	懇親会費
事 業 収 入		30,944,000	
	講習会、講演会収入	10,150,000	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 1,250,000/ Optics & Photonics Japan 7,500,000/ その他・支部 0/ 光学シンポジウム 1,400,000/ 国際会議 0/
	会誌出版事業収入「光 学」	3,280,000	別刷代収入 1,000,000/ 広告料収入 2,250,000/ 懇親会費 30,000/
	会誌出版事業収入「Optical Review」	8,300,000	別刷投稿 7,000,000/ 購読料 1,300,000/
	研究グループ事業	8,714,000	参加費収入(会費) 6,354,000/ 予稿集収入 755,000/ 受取利息収入 2,000/ 協賛金収入 300,000/ 受取寄付金収入 0/ 雑収入(バックナンバー等) 803,000/ 光学研究G補助金収入(日本光学会・応用物理学会から) 500,000/
	産官学推進事業収入	500,000	講習・研究会 0/ 奨励金 500,000/ 予稿集 0/ その他 0/
雑 収 入		340,000	
	受 取 利 息	0	
	雑 収 入	340,000	バックナンバー、資料コピー代
引 当 金 戻 入		0	
	貸倒引当金戻入	0	
繰 入 金 収 入		8,987,000	
	分科会賛助会費還元金	3,536,000	
	分科会給与補助	5,451,000	学会担当者分給与応物から繰り入れ
事業活動収入合計		58,055,400	
当期収入合計		58,055,400	
前期繰越収支差額		74,000,000	
収 入 合 計		132,055,400	

(支出の部)

大 科 目	中 科 目	予 算	内 容 (金額記入)
講習会、講演会事業費		10,925,000	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 1,230,000/ Optics & Photonics Japan 8,090,000/ 支部・その他 225,000/ 光学シンポジウム 1,380,000/
	臨 時 雇 賃 金	520,000	臨時雇賃金 0/ 0/ 500,000/ 0/ 20,000/
	印 刷 製 本 費	1,870,000	サマーセミナー 0/ 冬期講習会 410,000/ Optics & Photonics Japan 1,000,000/ 支部・その他 0/ 光学シンポジウム 460,000/
	諸 経 費	8,535,000	業務委託費 0/ 0/ 2,300,000/ 0/ 0/ 旅費交通費 0/ 170,000/ 200,000/ 0/ 80,000/ 賃借料 0/ 174,000/ 2,900,000/ 5,000/ 190,000/ 通信運搬費 0/ 30,000/ 150,000/ 0/ 60,000/ 懇親会費 0/ 0/ 0/ 0/ 会議費 0/ 140,000/ 700,000/ 0/ 400,000/ 消耗品費 0/ 1,000/ 50,000/ 0/ 0/ 諸謝金 0/ 300,000/ 40,000/ 140,000/ 150,000/ 雑費 0/ 5,000/ 250,000/ 0/ 20,000/ 共催会合負担金 0/ 0/ 0/ 80,000/ 0/ 支援金支出 0/ 0/ 0/ 0/ 0/
会誌出版事業「光 学」		21,475,000	
	印 刷 製 本 費	10,490,000	
	郵 送 費	2,500,000	
	諸 経 費	8,485,000	業務委託費 5,745,000/ 編集委旅費交通費 2,000,000/ 通信運搬費 300,000/ 賃借料 120,000/ 会議費 300,000/ 消耗品費 0/ 臨時雇賃金 0/ 雑費 20,000/ 懇親会 0/
会誌出版事業「Optical Review」		10,535,000	
	印 刷 製 本 費	4,600,000	
	郵 送 費	1,400,000	
	諸 経 費	4,535,000	業務委託費 2,300,000/ 英文校閲料 1,600,000/ 旅費交通費 50,000/ 通信運搬費 20,000/ 賃借料 125,000/ 会議費 80,000/ 貸倒引当繰入 200,000/ 別刷投稿料補助 0/ 雑費 160,000/ 懇親会 0/
産官学推進事業		500,000	
	印 刷 製 本 費	0	
	諸 経 費	500,000	臨時雇賃金 0/ 旅費交通費 0/ 賃借料 0/ 通信運搬費 0/ 懇親会費 0/ 会議費 40,000/ 諸謝費 0/ 奨励金支出 400,000/ 雑費 0/
研究グループ事業		9,114,100	
	印 刷 製 本 費	1,793,000	
	諸 経 費	7,321,100	臨時雇賃金 1,061,000/ 旅費交通費 793,000/ 会議費・懇親会費 2,485,000/ 通信運搬費 220,000/ 賃借料 893,000/ 消耗品費 88,000/ 諸謝費 580,000/ 業務委託費 400,000/ 支払補助金 350,000/ 雑費 51,000/ 奨励金 400,000/
国際協力支援金		1,100,000	
	旅 費 交 通 費	0	
	諸 経 費	1,100,000	国際協力支援金 600,000/ 諸謝金 500,000/ 会議費 0/ 印刷製本費 0/
表 彰 事 業 費		500,000	旅費交通費 300,000/ 諸謝金 40,000/ 通信運搬費 40,000/ 会議費 20,000/ 雑費 100,000/
分科会運営費(含幹事会)		17,474,000	
	給 与 手 当	5,451,000	学会担当者負担
	一 般 印 刷 製 本 費	75,000	諸印刷代、資料コピー代
	賃 借 料	1,410,000	
	諸 経 費	9,820,000	業務委託費 7,000,000/ 旅費交通費 1,800,000/ 臨時雇賃金 100,000/ 諸謝金 0/ 通信運搬費 200,000/ 電話料 0/ 会議費 320,000/ 懇親会 0/ 清掃光熱水料費 0/ 消耗品費 200,000/ 雑費 100,000/ 租税公課 0/ 振替手数料 100,000/ 活動支援金受入支出 0/
	補 助 金 支 出	500,000	研究グループ補助金
	貸 倒 引 当 金	218,000	未納会費
繰 入 金 支 出		2,316,000	(他会計への支出額)
	学 会 事 務 費	2,316,000	事務手数料
予 備 費		0	
事業活動支出合計		73,939,000	
事業活動収支差額		-15,883,700	
当期支出合計		73,939,100	
当期収支差額		-15,883,700	
次期繰越収支差額		58,116,300	